吉備国際大学研究紀要
（人文・社会科学系）
第33号，89－101，2023

# 幼児期におけるシュタイナー教育のぬらし絵の実践報告

佐藤　尚宏

## Practical report “wet on wet（watercolour）painting at Waldorf education in early childhood”

Takahiro SATO

**Abstract**

In this paper, I will report on the preparation, environment setting, syllabus planning, consideration points and methods of instruction for the “wet on wet（watercolour）painting at Waldorf education in early childhood（4-5 years old）”.

**Key words**：Waldorf education, wet on wet painting, in early childhood, Practical report
**キーワード**：シュタイナー教育，ぬらし絵（にじみ絵），幼児期，実践報告

## １．研究の目的

### (1) 日本におけるぬらし絵の導入と広がり

日本にシュタイナー教育が大きく知られるようになったのは，1986年刊行の「ミュンヘンの小学生」子安美智子著がきっかけと言われている。その後各地でシュタイナー教育を取り入れる幼稚園などが現れ，卒園児向けの土曜クラスが広がり，全日制のシュタイナー学校設立へと広がっていく。そのような流れの中で1994年には教員養成講座[注1)]が開講されるようになり，だんだんと教授法が知られるようになった。

シュタイナー教育は芸術教育と言われ特徴的な教授法がいくつかあるが，その中でも水彩画の「ぬらし絵」と呼ばれる授業実践は，土曜クラスや絵画教室など草の根の活動でも取り入れやすかった。さらに2000年からは美術教員に焦点を絞ったシュタイナー美術教員養成講座[注2)]がはじまり大きな広がりをみせてきた。

### (2)「にじみ絵」という呼称の発生と混乱

シュタイナー教育の草の根の活動が広がる過程でいつしか「にじみ絵」の呼称が生まれて広がり，実践者の考えや感覚で「ぬらし絵」と呼ぶか「にじみ絵」と呼ぶか決められていくようになってきた。

「ぬらし絵」とは濡れた画面に描くという手法に焦点を当てた呼称であり，「にじみ絵」とは描いた結果生まれるにじみという成果に焦点を当てた呼称である。シュタイナー教育が生まれたドイツ語では「Nass-in-Nass-Technik」英語では「wet on wet painting」と

吉備国際大学通信教育部心理学部子ども発達教育学科
〒716-8508　岡山県高梁市伊賀町８
*School of Psychology, Kibi International University*
*8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan（716-8508）*

呼ばれており，直訳すると「濡れた画面に描く」であるため「ぬらし絵」が本来の意味に近い。それでも「にじみ絵」の呼称が広がったのは，目に付きやすい「にじみ」という単語を使うことで他の描画材や水彩画との違いが伝わりやすいからではないだろうか。

一方でシュタイナー教育外の一般的な美術教育においては，造形あそびの領域で「絵の具あそび」「色あそび」としての「にじみ（にじみ絵）」がある。これはデカルコマニーやマーブリング，スタンピングなどの技法と同列に扱われており，絵の具・色を使って遊ぶことに焦点が置かれているのでシュタイナー教育の水彩画とは本質的に異なる物だ。

このような状況から現在「にじみ絵」と呼ばれる物は「シュタイナー教育におけるぬらし絵」と「造形あそびの中の色あそびとしてのにじみ絵」の本質的に異なる２種類の物が混在しており，混同・混乱を助長する背景になっている。そのような点を考慮し本稿では「ぬらし絵」という呼称を基本とする。

### (3) 幼児期のぬらし絵実践の課題

小学校におけるシュタイナー教育の水彩画実践は学年ごとに一定のカリキュラムが存在し，文献や教員養成講座，美術教員養成講座によって学習できるが，幼児期における水彩画実践は美術教員養成に特化したものは見当たらず，一般の園やグループが取り入れるのが難しい状況となっている。さらに，幼児のぬらし絵は基本的に自由画である上に具象画ではないため「造形あそびの中の色あそびとしてのにじみ絵」と質的な違いを区別することが難しい。

そこで本稿では「幼児期におけるシュタイナー教育のぬらし絵実践」についてまずは実践手法を明らかにする事を目指し，しいのみ幼稚園（現在こども園）での実践（2020年10月～）において模索した内容を報告する。

## ２．ぬらし絵実践のための準備と環境設定

ここではぬらし絵を実践する上で必要な道具の準備や環境設定について，どのような工夫や配慮をしたか，実践を通してわかった注意点などについてまとめた。

材料や道具についてはおもちゃ箱【公式通販】[注3)]において入手できる。それ以外の物を選定している場合は別途明記する。

### (1) 道具の配置

各自のテーブルには絵の具と筆，皿，水入れが置かれた状態で子ども達は着席する。その後，紙を貼った画板が配られ準備が完了する。道具の机上への配置は写真１，２のようになる。

画面の向こうに絵の具を配置した理由は，筆を洗いタオルで拭く行為と絵の具を選び筆につける行為の場所を分けることで，２つの行為が混同しにくくなり色を選ぶ時に３色が均等に意識できる事を意図した。

写真１　道具の準備（年長）

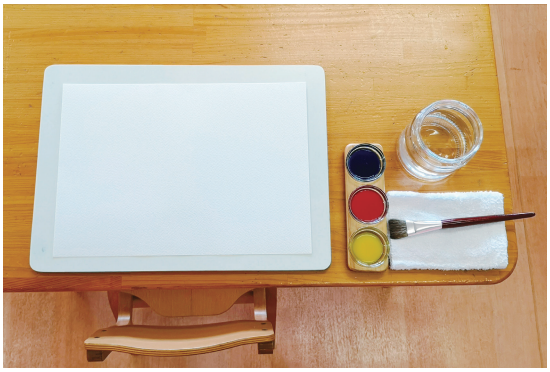

写真２　道具の準備（年中）

ただし身体が小さい子の場合水入れと絵の具が遠くなり描きにくいという問題が生じたので，年中児については写真２の配置を取った。

筆ふきタオルを横向きにして水入れが近くなり，絵の具をその横に配置した。身体の小さな子でも手が届くようになるが，絵の具皿の位置は成長に合わせて画板の向こうに戻している。

### (2) 各道具の工夫や注意点

#### １）絵の具

シュタイナー教育のぬらし絵では透明水彩絵の具を使用する。ぬらし絵＝紙が濡れている最大の利点は紙の白さが光を反射し絵の具を透過することで濡れ色の生き生きとした美しさを生む点であり，その美しさを引き出すためには光を透過できる透明水彩を使わなければならない。不透明水彩の場合は絵の具表面の反射光としての色しか見えてこないので絵の具という物質の色でとどまるが，白い紙が反射した光を通して見えてくる色は光を感じさせる色となる。これは気にしなければ気付かない小さな違いかもしれないが，体験の質は全く別の物となる。濡れた紙と透明水彩の組み合わせによってはじめて光の色に近い感覚で描く事が可能になるのでぜひ体験して欲しい。

透明水彩絵の具の中でも，ここではシュタイナー教育で使われている定番のシュトックマー社の中からゲーテイエロー，ゲーテレッド，ゲーテブルーの３色を選んだ。

ゲーテカラーはシュトックマー社の通常の絵の具より高彩度で色料の三原色に近いため，混色によって生まれる色がより豊かになる。また粘度が高いため水を多めにして薄く調色しても粘度を保って描く事ができ，ゆっくり混ざるため筆致が残りにくくゆるやかなグラデーションを比較的簡単に描くことができるという特徴がある。これらの特徴によって色そのものに浸り，味わう行為に入りやすい。幼児期のぬらし絵は具象物を描く絵画というよりも，色彩に感情やファンタジーをシンクロさせて心をしっかりと働かせる事が重要であり「心の筋トレ」といえる。そのためには筆致が残らず物の姿を描きにくく，発色が美しく色そのものの力で感覚や感情に働きかけるゲーテカラーの効用は大きい。

ST42055　ゲーテイエロー　　ST42051　ゲーテレッド　　ST42059　ゲーテブルー

**写真３　シュトックマー社の透明水彩絵の具**

絵の具の濃さの調整は回数が進むにつれてだんだん濃くなるように進めている。

年中児がはじめる時は特に水を多めにして薄くし線描や姿を描く感覚を弱めることで，色そのものを感じとり味わえるように導いた。このような導きにより意図をもって描く感覚が薄まり，色の変化を楽しむ色あそびの要素が強めに入り込むようになっている。＊写真４

**写真４　年中前期：ごく薄目の絵の具による作例**

経験を積むにしたがって色あそびの無秩序な画面から意図的な彩色がしやすいように，色の輪郭が見えるように絵の具を少し濃くしていった。＊写真５

年長になると意図的な彩色をする子どもの割合がさらに増えてくるので，もう一段階濃い絵の具を用意した。＊写真６

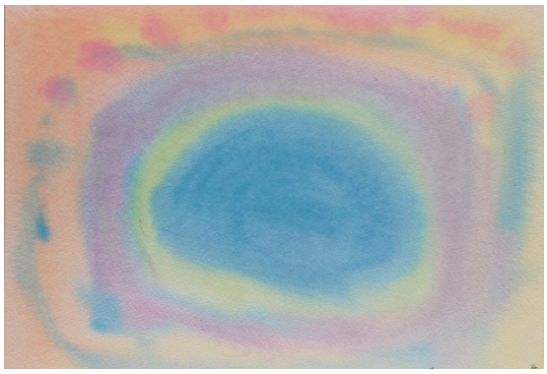

**写真５　年中後期：やや薄目の絵の具による作例**

**写真６　年長前期：濃い目の絵の具による作例**

この濃さになると，たっぷりと濃く絵の具を使う子どもの作品には混色によってモアレのような濁った色むらのような現象が発生してしまう。経験値や気質にもよるが，たっぷりと絵の具を使ってどんどん描き込むようなタイプの子ども達の想いを受け止めきれなくなってきた。ゲーテカラーは形態が定まりにくいため子ども達は描く行為に没入しやすいが，それが逆に形態を描く感覚を眠らせてしまう場合がある。また粘度が高くねっとりと画面上に留まるため，絵の具の量が多すぎると筆跡で色が剥げていく状態になる。＊写真７

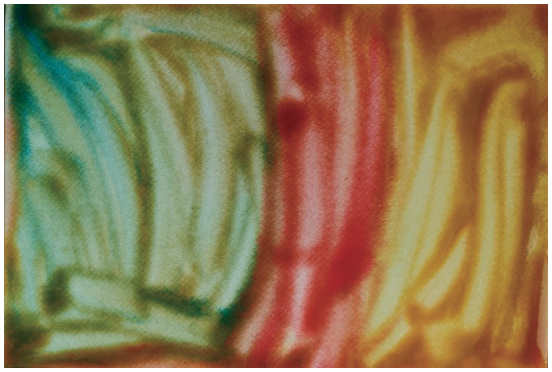

**写真７　年長後期：濃い目の絵の具による作例**

毎週描く頻度の年長児後期ではこの問題が増えてきたので，解決のためゲーテカラーではなく標準的なレモンイエロー，カーマイン，ウルトラマリンブルーに変更した。

２）筆

ぬらし絵では線描ではなく色そのものを味わえるように大きめの平筆が使われる事が多いが，ここではフレーベル館の幼児用平筆[注4]を用いた。選定の理由は①１本あたり620円で他社同等品770円より安価（2022年12月末時点）かつ②軸が塗りで汚れにくく手入れしやすい点が大きな選定理由である，他にも似たような平筆と比較して③毛足の長さが適切，④羊毛の白い平筆より毛に腰があるため毛先の反発力を感じやすい，の４点である。

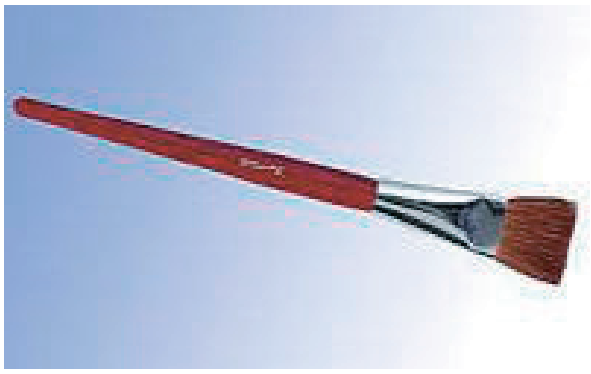

**写真８　幼児用平筆（フレーベル館）**

実際に使ってみると他社同等品より耐久性も高いように感じ，幼児から小学生低学年まで使用できる筆としてベストチョイスと考えている。

３）絵の具皿・トレイ

絵の具を汚してしまう幼児の場合はひとりひとりに絵の具皿を与えたいので100円ショップにて小皿を購入し，３つ並べて持ち運びできるトレイを自作した。

写真９　絵の具皿・トレイ

４）水入れ

シュタイナー教育の紹介では水入れの色の変化を楽しむ点からガラス瓶が推奨されている。ここではΦ10cm×高さ10cmの規格品を百円ショップで一括購入した。＊現在廃番

各地での活動の様子を見ると色々な使用済みの瓶を使っている姿も見られるが，できれば専用の瓶を用意してあげたい。ポイントは①背が低く瓶の底に毛先を当てて洗える，②口（底面）が広めで安定し，③背が低くても水の量を確保できる（500ml以上），の３点である。

筆の洗い方として水入れの中で筆をクルクル回す方法では絵の具の洗い流しが不十分になりやすい。瓶の底に「筆をトントンしてね」「10回トントンしたらきれいになるよ」と指導している。21.5cmの長さの筆の

写真10　筆洗いの瓶

真ん中を持つと指先から毛先まで10センチ程しかないので背の高い瓶だと底に届かず，背が低い瓶が最適だ。

５）紙

学童期によく使われる画用紙などは水につけると破れてしまうため，水彩用紙を使用する。輸入されている専用用紙は価格が高めでサイズも大きすぎるため低価格の水彩用紙としてmuse社のサンフラワーペーパー（M画）[注5)]八つ切りサイズを使用している。ヴィフアール水彩紙より白色度が高く，画面の凹凸も強めで絵の具が留まりやすくコストパフォーマンスに優れた水彩用紙である。

作品返却時にクリアファイルに入れて保管できるように，事前に少しカットしてB４サイズで描く事もできる。

６）画板

シュタイナー学校の芸術教育[注6)]では，“厚さ６mmのファイバーボードに灰色の艶消しエナメルか油を塗って製作する”と紹介されている。ここではベニア板に化粧用シートを貼った合板を購入しカットして使用した。これは化粧用シートが温度によって伸び縮みして，冬場に反りが発生するため失敗であった。反り方が逆向きのベニア板を裏に貼り合わせてみたが完全に平滑を保つことはできていないため，問題が解決できていない。

解決するにはプレス加工できる木材加工工場にて製作してもらうか，アクリル板や低発砲塩ビ板などプラスチック系の板で製作する方法があるが，単価が高くなり悩ましい。曲がりの少ないシナベニアを購入し蜜蝋ワックスやニスを塗るという方法が現状では次善の策である。

７）海綿（スポンジ）・刷毛

当初スポンジを使用していたが使用している水彩紙はやや表面が弱いためか強めに水切りすると跡が付く

事が多く刷毛に変更した。100円ショップの物が使いやすかったが金属が錆びてくるため，金属を使用していない「白毛 糊刷毛 特製」[注7]をMonotaROにて購入した。

写真11　刷毛

8）バット（収納ケース）

調理用のトレイやバットなども使えるが，ここでは衣装ケース（天馬フィッツケースすき間用53）[注8]を選定した。使用後は絵の具皿・トレイと水彩用紙を収納している。

写真12　絵の具皿・トレイ

### (3) 部屋の構成

授業の展開に合わせて，お話，各自の制作テーブル，教卓での紙貼り，作品鑑賞の４つにゾーニングを行い授業を行っている。

制作ゾーンのテーブルは円（円弧）型に並べて順番に回りやすくしたり，教室型でひとりひとりが制作に集中できるようにしたり，グループ学習型で他の子の制作を見て刺激が生まれるようにしたり，状況に合わせて使い分けている。

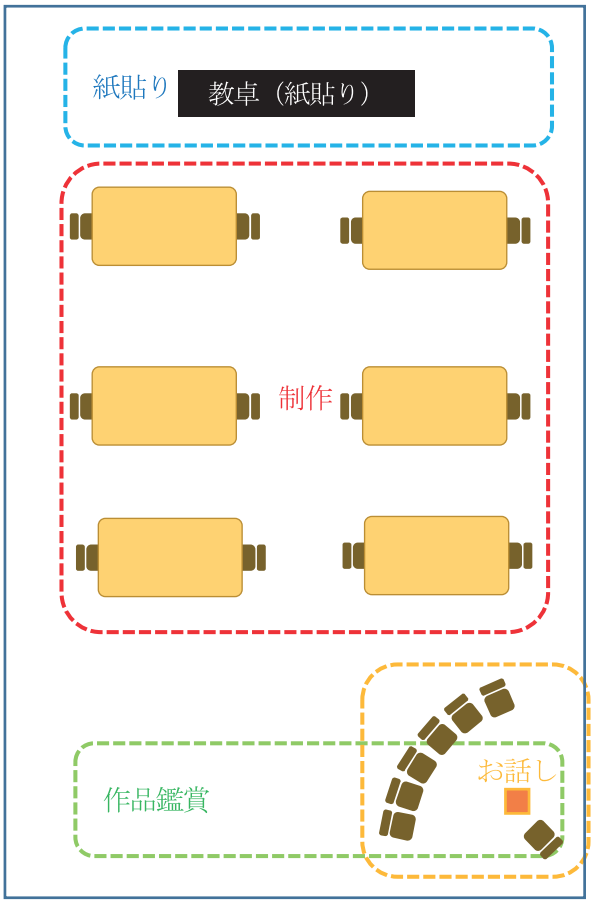


図１　部屋の構成

## ３．授業計画

呼称は「えのぐのじかん」とし，年中の４月からはじまって年長卒園までの２年間で全体の流れを構成している。

### (1) 導入期

はじめの導入期は様々なことに慣れていく期間として，少しずつ進めている。まずは外部講師に慣れ，一斉授業という時間の流れに慣れ，道具に慣れ，制作に慣れる事を目指している。

1）初回はパステル画で色が生まれる体験

「えのぐのじかん」に歌う「にじのはし」をテーマにした創作紙芝居で，空から光の粒が降ってきて手で触ると黄・赤・青の色の橋が生まれ「にじのはし」に

なるお話しを語り聞かせる。パステルの粉を画用紙に振りかけて大きく手を動かして円弧を描き虹の橋を描く。

まずは外部講師に慣れてもらうこと，お話し→制作→鑑賞という時間の流れに慣れてもらうこと，単純な行為から色が生まれる喜びを充分感じてもらうことを目標とした。

**写真13　パステル画による虹の作例**

２）単色の世界にひたる（３回）

色を探す色こびとの素話で導入後，色こびとの見つけた三原色，黄・赤・青により彩色していくようすを実演し各自で制作する。

単色を塗り広げていくだけなので，大人にとっては意義が感じにくいかもしれないが，子ども達ははじめてのぬらし絵で色が広がる様子や，だんだんと濃くなっている様子を見て，感じて色にひたりながら大きく心を動かしている。筆を洗うと水の色が変わることも大きな喜びのようで「見て見て○○色になったよ」という報告は年長になっても続いている。

指導の配慮としては，色の質を深く味わい，言葉とつなぎ語彙を増やすためにも，それぞれの色の感覚をできるだけ言葉にして声かけしていく。例えば黄色の場合は「光ってきたみたいだね」「眩しい色だね」「明るくなってきた感じがするね」「なんか元気な感じだね」などである。

技能面では筆の扱い（持ち方，洗い方，絵の具の付け方など）になれていく段階で，単色なので色変えがなく筆洗いができなくても問題にならないため，多少迂闊な子どもの場合でも失敗を自覚する事なく楽しみながら慣れていくことができる３回となる。

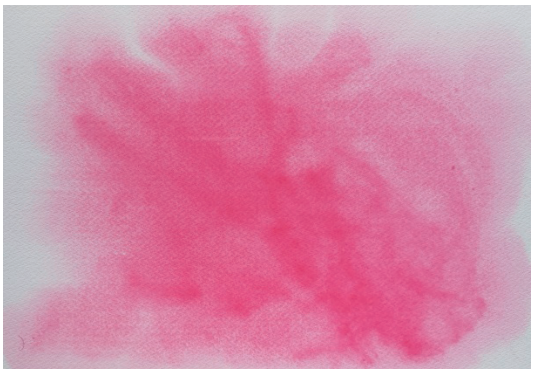

**写真14　単色による作例〈赤〉**

３）２色の混色で生まれる世界にひたる（３回）

黄＆赤，黄＆青，赤＆青の３つの組み合わせで２色を使って描く段階では，色と色が出会って変化するダイナミズムをたっぷりと味わっていく。ここでも最初に実演し各自で制作する。

２色の混色では何度繰り返しても色が濁る事がないため，心ゆくまで混色を楽しむ事ができる。例えば黄＆赤の場合，元気で明るい黄色の世界に赤が入り込み橙が生まれることで温かさが生まれていく。もっと赤を足すとだんだん熱く激しさを増していく。そこからまた黄色を足しておくと穏やかな柔らかい温かさが戻ってくる。そのような尽きることのない色の変化の世界を味わっていく事ができる。ただし，どの程度描き込むかは慣れや気質によって変わるため，さっと描いて満足し終わる子どももいれば繰り返し丹念に描き込んで楽しむ子どももいてそれぞれである。

指導上の配慮としてここで重要なのは色と色を塗り重ねて色が変わる体験をできるだけ知らせることだ。ぬりえ的な感覚だと画用紙はまだ塗れていない白い所とすでに色を塗った所の２種類としてしか捉えられていないため，１度塗った所にまた色を重ねていく感覚がない子どもがいる。そこで実演でできるだけ色の変化・揺れ戻しを見てもらう事が大事である。「黄色さ

んがやってきたね」「赤さんと仲良くなれるかな？」「一緒に遊べるかな？」などの言葉がけとともに色が混ざり変化していく様子を見せていく事を大切にしている。

**写真15　２色による作例〈黄・青〉**

技能的には色変えの時に筆をしっかり洗ってから色を付ける練習期となる。ここでも筆洗いが不十分でも色が濁らないため，失敗を自覚せず自分のペースで楽しみながら慣れていく期間となる。

### ４）３色の混色で生まれる世界にひたる

いよいよ三原色を使って描く段階にはいる。これは濁色に出会う段階となる。三原色が全て混ざると生まれる濁色はいわゆる「汚い色」と呼ばれる事が多いが，「落ち着いた色だね」「渋い感じだね」「何色かわからない複雑な色だね」「名前がついていない色を発明したね」など，濁色の質や価値を伝える言葉がけに努めている。

他動傾向のある子どもなどは特にドンドン描き進めて色と色が出会って変化するダイナミズムをたっぷりと味わってやりきってしまうので，いわゆる「ぐちゃぐちゃな絵」になっていく事もある。そのような絵の質や価値を伝えるためには「曇り空みたいだね，雨が降るかな？」「暗くなってきたね，夜になってくるかな？」「すごい風が吹いてきたね，嵐みたいだね」「わー台風みたいだ」などと言葉と造形の感覚をつないでいく。

技能面では筆洗いの課題が明確化される時期となる。３色の混色では色が濁るため，丁寧で確実な筆洗いができないとすぐに画面も皿の絵の具も濁ってしまう。皿の絵の具が濁っている場合は技能面で拙い子どものサインであるので，①濁っている事の指摘，②絵の具の濁りの影響の指摘，③濁らないための筆洗いの指摘，の３つのレベルで指導していく。ただし「心のまま」「思うまま」表現できている状態を壊さないように，慎重に指導する必要がある。

## (2) 展開期

制作に慣れてきた後は，様々な造形の世界と感覚の世界をつないでいく試みを進めていく事で表現の豊かさを目指していく期間となり，導入で絵本を使用する。ただし「導入で使った絵本の世界をテーマに描くように促さない」ことを大切にしている。絵本の使用は多様な造形の世界との出会いに力点を置いているので，あくまでも視点を広げるための紹介という位置づけである。その刺激を絵に生かすかどうかはその子次第であり，実際に取り上げた絵本をテーマに描く子どもはほとんどいない結果になっている。

### １）色彩の変化を味わう

展開初期には色彩が変化していく楽しさを味わって自らの制作を楽しむためのヒントとして「じぶんだけのいろ」[注9]「シーツうさぎフウフウ」[注10] など色が変化する絵本や素話を取り上げ，色や形が変化するイマジネーションのきっかけづくりに留意している。

### ２）色彩の世界を深く味わう

季節，天気，時間の造形を味わうために「あたしのすきなものなぁんだ」[注11]「よあけ」[注12]「りすとかえるのあめのたび」[注13] などを取り上げたり，特定の色を深く味わうために「あおのじかん」[注14]「シルクロードのあかい空」[注15] などを取り上げている。

3）実世界の色彩を意識する

写真絵本「いろいろはっぱ」[注16]を取り上げ，葉っぱの様々な大きさや形，表面の違いや，色の変化などを紹介する。子ども達が暮らしている外界へのまなざしを意識するようなきっかけとなる事を期待している。

4）感情世界の色彩を意識する

絵本「どんなきもち？」[注17]を一緒に見ていきながら，感情世界の造形を味わっていく。造形の違いを読み取りにくい子どももいるため，それぞれのページの特徴について子ども達の発言を促しながら色彩感情や形の感覚（直線や曲線の感じの違いなど）に出会っていく。

5）クラスメイトの作品を意識する

何人かの作品を用いて，簡単なお話しを付けて紙芝居にする。作品の雰囲気や質からお話しや言葉を与えて，自分以外の表現の多様性と出会うきっかけとなる。

## 4．授業の流れ

全体は１時間の授業で，入室の挨拶→全体挨拶→お話し→紙貼り→歌→制作→鑑賞→遊びと挨拶という流れとなっている。

### (1) 入室と全体挨拶

普段過ごしている部屋から移動してくるので，入室時にひとりひとり握手などをして出迎える。反応の仕方で気質やその日のコンディションが多少伺える事と，「自分と向き合ってもらっている」と思ってもらえることを期待している。入室した順番にその日の席を選んで着席していく。

着席が終わったら，改めて全員で起立し，ご挨拶をする。必須ではないが公立小学校への就学を視野に「集団行動」や「一斉指示」への対応に慣れるために取り入れている。強く大きな号令ではなくて，静かな声で

写真16　入室の挨拶

写真17　全体挨拶

行い，楽しみながら「いい姿勢の人はいるかな？」「見つけた！」とすべき事を自分で気付くように促したりできた自分を自覚し喜びを感じられるように進めている。

### (2) お話し

部屋の隅でロウソクに火を灯し，その日のお話しや

写真18　絵本の読み聞かせ

絵本を楽しみます。静かに聴く事も大切ですが感受したことを言葉で表現することも大切にしたいので思い付いたことをつぶやいたり話したりを尊重して進めている。

お話しや絵本は色や造形の世界に誘い込むための刺激を与えるためで，子ども達の心の中に色へ向かう気持ちをつくる「心の準備体操」の時間を意図している。

### (3) 紙貼り

教卓に集まり，紙を濡らし画板に貼っていく過程は，その日の人数を数えて全員で紙の数を数える所からはじまる。バットに紙を入れて濡らす作業は，はじめは教師が行って見知ってもらい，年中さんの後半からは子ども達自身で水に入れていけるようにした。

紙が水を吸うまでの数分待つ時間を楽しみに変えるため，オルゴールボール（メルヘンクーゲル）をバットの上で揺らして音を振りかけた。その後，ひとりずつ順番にオルゴールボール（メルヘンクーゲル）を回し，思い思いに音を楽しむ事で，紙が水を吸い込む時間がただ待つだけの時間ではなく「素敵な絵になるように魔法をかける」豊かな時間となった。

画板に紙を貼った画板を受け取った人から順に着席します。

年長になると時期を見て自分で画板に貼る所までできるように導いていきますが，刷毛で水を切る所は仕上げとしてこちらで行っています。

### (4) 最後の準備

「紙の準備ができたので筆の準備をしましょう」と声をかけて，筆にたっぷり水を含ませます。これは初期には筆洗いの動作の練習も兼ねていて「トントントンとしてね」と促します。

「筆の準備ができたので絵の具にお祈りの歌を歌いましょう」と声をかけて，「にじのはし」を歌います。

にじのはし　吉良創作詞･作曲

なないろの　にじのはし
ひかりのいろの　にじのはし
わたしのえのぐに　おりてこい
ひかりのいろを　つれてこい

筆を両手胸の前に捧げ持ち，身体を左右に揺らして歌います。手だけしか動かさない子や手と頭しか動かさない子，上半身全体で揺らせる子など様々で，見取りと模倣の力の様子が伺えます。

「ひかりの色は降りてきてくれたかな？」と問いかけ「では，はじめましょう」と促します。

### (5) 制作

制作の時間はひとりひとりの画面の様子や取り組みの様子を言葉にする声かけをしていきます。

また絵の具がなくなった時の補充などの補助を行います。「○色がなくなった」という子には「そうだね，なくなったね」と返して「えのぐをください」や「○色のおかわり」という発言を待ちます。

写真19　紙貼り

写真20　片付け

「できたら教えてね」と伝え，完成は子ども自身が決めるようにします。「どんな色になった？」と制作への想いを訊ねて言葉が出てきたらタイトルとして書き留めます。特にない場合も多いのでその場合は日付と名前だけを書いて片付けをしてもらいます。

### (6) 片付けと自由時間

水入れと筆とタオルを教卓に返します。水入れの水はバケツに流します。絵の具皿と作品は教師が運びます。片付けが終わった子どもはグロッケン（鉄琴）を叩いたり，その日の絵本を見たり，子ども同士で遊んだり，他の人の作品を見て全員が終わるのを待ちます。

### (7) 鑑賞

できた作品を床に並べて自分の作品の前に座ります。

「今日も素敵な絵ができたと思う人」

「○○○な感じの絵になったと思う人」

などと質問して手を上げてもらいます。自己評価をうかがい知る事ができます。

写真21　鑑賞

○○○には，子ども達の作品を見て感じとった質を表す言葉を入れて質問していきます。具体的には明るい⇔暗い，賑やか⇔静か，やさしい⇔力強い，やわらかい⇔硬い，朝っぽい⇔夜っぽい，さむい⇔あたたかいなどです。

### (8) 遊びと退室の挨拶

ひとりひとりと身体を使った遊びをして発散したあと，挨拶をして送り出します。

写真22　身体をつかった遊び

## 5．まとめ

2020年10月よりほぼ丸２年間の実践をふりかえり，改めてぬらし絵の意義や意味について考え，今後の研究につなげたい。

### (1) ぬらし絵の意義

「絵を描かない子どもでも，にじみ絵なら描く」

これは，ある実践園の先生がおっしゃった言葉で示唆に富むが，なぜぬらし絵なら描くのか考えたい。実際にこれまで３園でぬらし絵を実践していて描かなかった子どもはほとんどおらず皆楽しんで描く事ができており，子ども達にとってぬらし絵は魅力的な活動として受け入れられている。

絵画表現をしたくない理由を考えてみると技能的なハードルと意欲面のハードルの２つがあるのではないだろうか。先に述べたようにぬらし絵は筆致がはっきり残りにくいため上手く描けた・描けなかったという評価をする機会が少なくなる。思うまま表現してもそれを受け入れてくれる画材であり，技能的な巧拙を評価される事はない世界である。このように技能的ハードルが低いために「ぬらし絵なら描ける」事が可能だ

と考えられる。

また意欲面では，やわらかく広がる色によって簡単に美しい多様な色の変化を生み出すことができるので表現できている喜びを充分得ることができる技法といえる。簡単な操作で大きく画面が変化するという応答的な活動の循環により，奥深く幅広い色彩の豊かさで多様な変化を生むダイナミズムが，子ども達の描きたいという欲求を駆り立てると考えられる。

つまり「ぬらし絵の世界は低いハードルと高い満足感によって，ほとんど全ての子ども達に受け入れられている」と言えるのではないだろうか。

### (2) ぬらし絵の効用

私たちは目から光を受け取り視覚情報として処理して，非常に多くの情報を得ている。既に述べたようにぬらし絵で生まれる色彩のドラマは物質としての画材の中では最も光の色に近い輝きと豊かさを持つ。この視覚情報の豊かさにより視覚認知の力は確実に磨かれるのではないか。

さらに重要な事は色彩心理の働きではないだろうか。人は周りの環境によって左右され，色彩環境によっても影響を受けると言われている。幼児期～小学校低学年くらいまでは，色彩は子ども達の感情を揺り動かし，子ども達は心を色彩にシンクロさせて感情を働かせるようだ。例えば小学校２年生の実践で赤をじっくり描く事があった。いつもは騒がしい男子も熱心に集中して赤を塗り重ねて，終わった時に漏れた言葉が「あーー，疲れた」だった。これは集中して描いた事もあるだろうが，その時は「赤の色彩としての質や力にシンクロして心を燃やしていたから」だと感じた。このように色と情動がシンクロする事で「心の筋トレ」が行われていると考えられるのではないか。

つまり，ぬらし絵の効用は，視覚認知の精度や感度を磨き上げ，豊かな情動を耕す心の筋トレ効果を持つのではないかという仮説を持っている。

今後，これらの仮説を確かめられるような実践や研究を進めていきたい。

### 引用文献・参考文献・注


１）シュタイナー教育教員養成講座　https://www.steiner-jp.net/

２）シュタイナー美術教員養成講座
https://www.tenkachisei.jp/theme_img/water_color/leaflet2017.pdf
https://www.facebook.com/VISIOPAEDE/posts/2428381383947501/

３）おもちゃ箱オンラインショップ　https://www.omochabako-webstore.jp/SHOP/180422/182329/list.html

４）幼児用平筆･フレーベル館公式オンラインショップ　https://www.froebel-tsubame.jp/shopdetail/045021000002/

５）muse社　https://www.muse-paper.co.jp/product/sunflower.php

６）シュタイナー学校の芸術教育－６歳から18歳までの授業を中心に
M. ユーネマン，F. ヴァイトマン（著），鈴木 一博（訳）

７）刷毛MonotaRO　https://www.monotaro.com/g/00957587/?displayId=11#

８）バット　https://amzn.asia/d/dJgqXcr

９）じぶんだけのいろ－いろいろさがしたカメレオンのはなし　レオ・レオニ　好学社（1978/4/1）

10）シーツうさぎフウフウ　やすい すえこ（著）長野 ひろかず（イラスト）　佼成出版社（2002/11/1）

11）あたしのすきなもの，なぁんだ？　バーナード ウェーバー（著）スージー リー（イラスト）　評論社（2017/11/20）

12）よあけ　ユリー・シュルヴィッツ（著，イラスト）　福音館書店（1977/6/25）

13）りすとかえるのあめのたび　うえだ まこと（著）　ビーエル出版（2022/6/17）

14）あおのじかん　イザベル・シムレール（著，イラスト）　岩波書店（2016/6/29）
15）シルクロードのあかい空　イザベル・シムレール（著，イラスト）　岩波書店（2018/6/28）
16）いろいろはっぱ　小寺 卓矢（著）　アリス館（2017/6/17）
17）どんなきもち？　ミース・ファン ハウト（著）　西村書店（2015/6/2）